

愛の力



タリタクム日本運営委員

シスターマルティネス・ヴァレリア(カノッサ修道女会)

「奴隷になっても、私は決して絶望しませんでした。自分を支えてくれる力を感じたのです」。

これは、7歳の時にさらわれ、10年間、奴隷生活を強いられたスーダンの聖人、ジュゼッピーナ・バキータの言葉です。バキータは、あるイタリアの外交官の優しさのおかげで解放されました。彼はバキータの尊厳を回復し、村に戻すために彼女を買いました。しかし、バキータは自分の生まれた村を覚えていなかったため、彼に仕え続けました。そしてこの外交官はイタリアに戻る際、バキータを連れて行きました。イタリアでバキータはイエスと出会い、洗礼を受けました。そして、カノッサ修道会に入会し、主に仕えました。バキータは人身取引との闘いにおける守護聖人です。

冒頭にこの物語を記したのは、この話がタリタクムを少し反映していると感じたからです。バキータが自由への道を切り開いたのは、イタリアの外交官の愛のわざのおかげでした。愛のわざは、タリタクム設立の基盤であり、タリタクムの一員として働く原動力です。多くの兄弟姉妹の苦しみを、ただ傍観することなどできません。世界中にはびこる悪の強力なネットワークの鎖を断ち切るためには、具体的な行動によって善のネットワークを形成する必要があります。時にはそれらはあまりにも小さく、機能しないかのように見えますが、名前も家族もある人々に着実に、自由をもたらしています。

昨年、私はタリタクム・ユース・アンバサダーのグループに寄り添っています。彼らの使命は、人身取引の現実を他の若者たちに知らせ、その事実を非難することです。彼らは、活動の実践のために、少ししかない自由時間を捧げようと決意しました。学校で出前授業を行い、人身取引と現代の奴隷制の現実を生徒たちに知ってもらうために、今年、彼らは新メンバーの育成に力を注いでいます。自分の仕事のスケジュールと学校側の要望を合わせるのは容易ではありませんが、目標を達成するために、時には休日を犠牲にして、懸命に努めています。

タリタクムの活動にはあまり力がないように見えるかもしれませんが。人身取引と奴隷制のネットワークはあまりにも強固で、断ち切れなと思うかもしれません。しかし、私たちは自分が一人ではなく、私たちの中には、自分たちを支え、団結させる力があることを知っています。だからこそ私たちは、兄弟姉妹を解放するために共に歩み始めることができるのです。それは、奴隷にされたバキータを支えたのと同じ力であり、現代世界の奴隷たちを支える力でもあります。その力こそが、主の愛の力です。その力は、兄弟姉妹のもとに行き、「タリタクム、あなたに言う、起きなさい」と語りかけるよう私たちを招いているのです。

タリタクム日本 秋のオンラインセミナー2023
難民を歓迎できる社会に
～アルペなんみんセンターの取り組みから～

タリタクム日本運営委員
シスター永瀬 あゆみ(サレジアン・シスターズ)

11月4日、タリタクム日本主催オンラインセミナーが開催されました。はじめに J-CaRM 委員長、山野内司教様の挨拶があり、今、ヨーロッパやラテンアメリカなど多くの国々で人の移動が激しくなっているのは、政治や経済的な問題などから人びとの中に不安が増し、今を生きるため、また子どもたちの未来のためにより安全な場所を求めて移動している。世界の問題はさらに広がってきている中にあるからこそ、皆が同じ意識、同じビジョンをもつ必要があると語られました。



今回のセミナーは、有川憲治氏(NPO 法人アルペなんみんセンター事務局長)を講師としてお迎えし、お話しを伺いました。はじめに、難民について話してください、世界の難民は1億1,000万人以上、世界では80人に1人は難民、その内の40%は子どもです。これからを担う次世代の子どもたちが不安定な状況におかれていることが、この数字を見れば分かります。日本は1981年に難民条約加入国となっていますが、これまで実際に難民として認められたのは1%以下です。つ

まり、41年間で認定した難民の数は1,117人(1982～2022)であり、難民条約加入国148カ国中110位です。

次に、シェルター、保護など、難民を支えるために、鎌倉市にあるイエズス会の修道院を活動拠点として2020年4月に立ち上げられた、アルペなんみんセンターの活動について紹介されました。このセンターは、主に仮放免の方々を受入れており、主な活動として、**Care/ささえる**:難民の定住サポート、シェルターの提供や医療相談、自立に向けた学ぶ場の提供、難民申請手続き支援、**Connect/つながる**:難民が地域とつながるために毎週土曜日に行われている畑作業、ボランティア活動として地域のデイサービスに出かける、**Change/変える**:難民問題の啓発活動、地域のイベント活動への参加を通して難民問題を知ってもらう機会を作る、などを行なっています。2023年4月から聖霊会の小金井修道院でもシェルターを始めました。

近年ウクライナ避難民を日本は19ヶ月で2,518人受け入れています。ウクライナの方々を積極的に受け入れていることがわかります。これまで日本は難民受け入れに消極的でしたが、今回の政府のウクライナ避難民受け入れをきっかけに、多くの自治体、企業、民間団体などが積極的な難民の受け入れ支援を表明しています。これにより難民に対する歓迎が根付いてくることを期待しています。質疑応答では、なぜ日本は移民難民を受け入れないのだろうかという質問に対し、それはまだ知らないから、出会っていないからであることが多く、差別意識があるではないか、といった指摘がありました。

最後に、タリタクム運営委員長、シスター弘田しずえ(ベリス・メルセス会)が、私たちには移民難民問題を市民社会に向けて見える存在にする責任があると述べました。そして、教皇様は「移民、難民、移動者の方々を歓迎し、保護し、促進し、共同体・社会に受け入れ」るよう、つねに訴えておられることを強調し、2022年「世界難民移動移住者の日」教皇メッセージ内の祈りをもって締めくくりました。

タリタクム出前授業 報告

タリタクム日本運営委員
山岸素子

ニュースレターの前号で、タリタクムで出前授業を始めたこととお知らせしました。今回の号では、私がこの秋に派遣された2つの出前授業の様子をご報告したいと思います。

＜暁星中学校・高等学校＞

10月6日、8時25分からの第1限の中学2年～高校3年生までの宗教講話の時間に、「共に生きる社会に向けて～日本に生きる難民・移民・外国ルーツをもつ人々の現状と取り組みから考える」というテーマでお話させていただきました。会場の講堂に入場後、生徒のみなさんの「おはようございます」という大きな声の挨拶で迎え入れられました。

45分という短い授業時間の中で、普段はあまり気づくことのない日本での移民ルーツをもつ人々の状況を、生徒たちが自分ごととして捉え、何か自分にもできることはないかと考えるきっかけになるような講話を、という宗教担当の先生からのご依頼でした。そこで、私自身がこうした仕事にかかわるきっかけとなった、中学生の時のアフリカ難民キャンプの飢餓状態にある子どもたちを知った衝撃経験や、その後、日本国内での外国人支援にかかわるようになって直接出会った方々を紹介しながら、その背景にある日本の難民・移民の現状と支援の取り組みをお話しました。そして、世界の難民・移民の状況と教会の取り組み、教皇フランシスコのメッセージを紹介して締めくくりました。特に同世代のペルー出身の高校生の動画メッセージの場面では、会場全体が静まり、生徒たちが集中して聴き入る様子が伺えました。暁星では生徒と社会活動をつなげるボランティアプログラムなどもあるので、今後のさらなる連携も期待しています。



＜聖霊女子短期大学附属高等学校＞

10月15日は、秋田の聖霊女子短期大学附属高等学校(以下、聖霊高校)2年生を対象とした宗教科の授業「聖霊スピリット」で、「共に生きる社会に向けて」というテーマでお話しました。聖霊高校には国際コースがあり、移民ルーツをもつ生徒たちもいる環境のなか、90分の授業では、講話の後にグループディスカッションや全体での分かち合いの時間を持ちました。聖霊高校は、7月の秋田の記録的な大雨災害で甚大な被害に遭い、電気やボイラー、水道設備などが水没してライフラインが絶たれる中、現在も仮の設備を使い、教職員や生徒のみなさんが日々大変な苦勞と調整をされながら授業を継続しておられることを実感しました。被災経験の中で、カトリック教会をはじめとした全国の人たちの支援と連携の力と励ましを受けてこられたといえます。今回の講話やその後の分かち合いが、教職員や生徒のみなさんの現在の経験と、日本で困難な状況に置かれている難民・移民の方々の状況が重なりあい「共に生きる」ことを考えられる時間であったことを願います。



タリタクム日本では、引き続き、お申し込みを受け付けておりますので、ご関心がある方は、事務局までお問い合わせください。

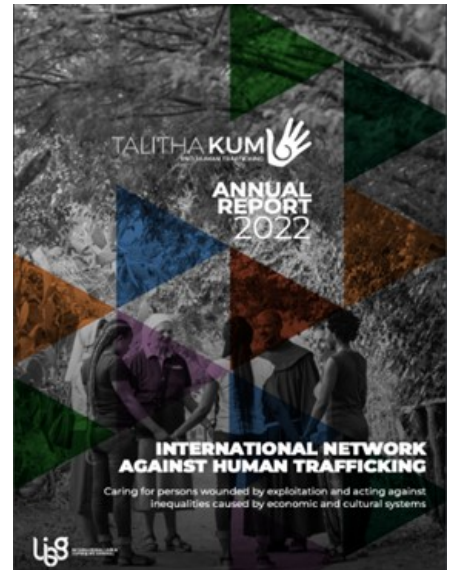
タリタクム・インターナショナルからの最新レポート 「タリタクムの貢献は大海の一滴にとどまらない」

タリタクム日本運営委員
クレア サンチェス

私はタリタクム日本の一員として1年以上活動してきました。タリタクム・ユースアンバサダーのアドボカシー・キャンペーンを手伝うことで、強力な組織力とネットワークをもつ人身取引との闘いに、少しでも貢献しようと努めてきました。

しかし、ウクライナや中東で起きている紛争、多くの国々で起きている社会的・政治的混乱、悲惨な貧困に苦しむ人々のニュースを耳にするたびに、いつも心が痛みます。それらの被災地には、人身取引の犠牲者となりうる、弱い立場に置かれた人々がさらに多くいると思われるからです。私の努力や取り組みは、人身取引をなくすには不十分で、何の役にも立たないと感じることもしばしばです。

しかし、「児童労働反対世界デー」と「人身売買反対世界デー」にあたって、今年6月12日に発表されたタリタクム・インターナショナルの年次報告書を読んで慰められました。この2022年報告書*は、予防、保護、起訴、パートナーシップの分野での目覚ましい成長を示しています。



タリタクムは、全世界の560,606人をつなぐネットワークに成長しました。これは2021年と比較して40%の増加です。この560,606人のうち、34,463人が人身取引の被害者であり、442,276人が予防活動の恩恵を受けた人、83,867人がネットワーキング、研修、能力開発活動への参加者です。活動は大幅に拡大しましたが、その一方で活動メンバー、協力者は5445人とわずかに減少しました(554人、9%減少)。

この報告書で、もうひとつ印象に残ったのは、他宗教や異宗教間のグループとの強力な協力関係です。2022年には、特にアジア、アフリカ、オセアニアにおいて、国内、地域、国際レベルで31%の伸びを示しています。タリタクムは、国、地域、大陸レベルのネットワーク間の連携を促し、被害者、逆境からの生存者、危機にある人を積極的に支援しています。この報告書は、このような多岐にわたる構造を反映しつつ、ネットワークのすべてのコーディネーターとメンバーの貢献をデータとして集約しています。

人身売買をなくすには、まだ長い道のりがあることは承知しています。しかし、タリタクムの使命のために無償で活動してくださる方々のことを思うとき、私たちはすでに戦いの半分に勝利していると確信します。私たちの努力は大海の一滴にすぎません。それでも、マザー・テレサが言われたように、「私たちには大きなことはできません。小さなことを大きな愛をもって行うのです」。タリタクム・インターナショナル・ネットワークのボランティアの皆さんに感謝します！

注*) https://www.talithakum.info/files/documentdownload/2023/report2022_en.pdf

オンライン詐欺に気をつけましょう！



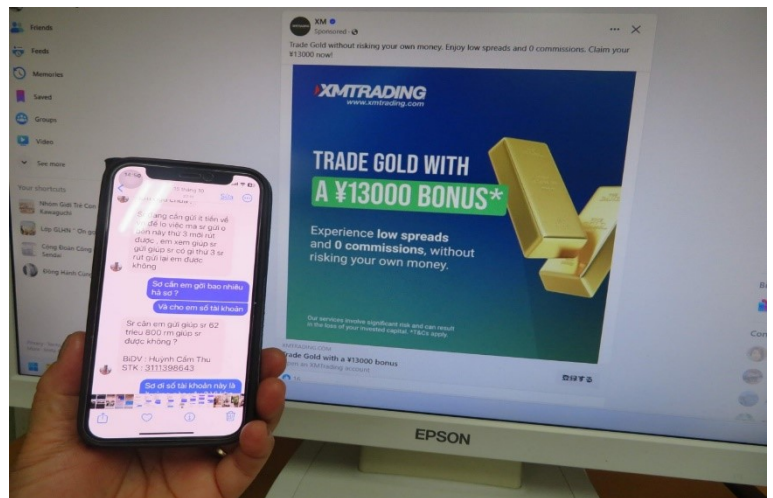
タリタクム日本運営委員
シスターマリア・ラン(聖ビンセンシオ・ア・パウロの愛徳姉妹会)

世界は今、インターネットの普及によって、様々な面で生活が便利になりました。多くの分野で、インターネットは人々を瞬時に繋げる手段となっています。特に、Zalo、Facebook、Twitter などのソーシャル・ネットワーク(SNS)は、人々を結びつけ、生活のあらゆる側面でコミュニケーションや情報交換を進歩させました。

留学や技能実習などで日本に来たベトナム人の若者たちは、家族、学校、会社、友達などと連絡を取るために必ず iPhone を使います。しかし便利な反面、若者たちは SNS を利用した詐欺、賭博、麻薬の売買などの犯罪に巻き込まれます。詐欺事件は昔からありますが、若者一人ひとりの警戒心と自己防衛スキルについて貴重な教訓を残しています。

私はベトナムの聖ビンセンシオの愛徳姉妹会のシスターマリア・ランです。さいたま教区の国際ショナルセンターでベトナム人のために働いています。労災、暴力、妊娠など、さまざまな分野の相談が毎日十数件届きます。特に最近はオンライン詐欺が増加しています。

いくつかの相談の例をご紹介します。一人の技能実習生が次のような手紙を送ってきました。約 300 万円、取られました。7 年間日本で働いて貯めたお金をすべて取られました。また、留学生のある女性は 250 万円近く騙し取られました。さらに、川口教会で結婚講座に参加しているある男性はこう語りました。「結婚式のため、ベトナムに帰る知人にお金を渡しましたが、知人はそのまま逃げてしまいました。わたしは多額の借金で心を病み、車に飛び込んで死にたいです…。」このような相談事例は他にもたくさんあります。



そのうちの 1 人を日本の警察に連れて行き、助けを求めましたが、「これは国際的な犯罪詐欺組織なので捜査は難しく、お金を取り戻すのはほぼ不可能です」と言われました。弁護士の先生に話をしてもらい、Facebook を通して注意を促しましたが、依然として詐欺の被害にあう人は絶えません。どうしたら被害に遭わないか、日々模索しています。

若者の声

「タリタクム・ユースのサマーキャンプに参加して」

タリタクム・ユースアンバサダー
カルロス・バプティスタ



早朝 4 時に目覚まし時計に起こされ、私は寝不足でした。大切な行事のために早起きすると、ある知人と約束したのです。リュックを背負い、30 分かけて仙台駅まで歩き、朝一番の新幹線に乗って東京、世田谷に向かいました。このサマーキャンプが有意義なものであったことを、読者の皆さんに是非、伝えたいと思います。

素晴らしいコミュニティには素晴らしい人が欠かせない

その知人はタリタクムに加わるよう熱心に私を説得してくれました。タリタクムの若者たちは情熱的だ、すごい人だ、といった簡単な説明でしたが、そうした漠然とした説明を聞くと、いったいその情熱的な若者たちはどんな人なのだろうと、想像が膨らみました。

このサマーキャンプを一言で表すなら、「結びつきのクレッシェンド（盛り上がり）」です。参加者同士の結びつきが刻々と強まっていきました。まず、人身取引についての基本的な説明と、専門家による講演から始まりました。虐待の被害者本人の証言を聞いて、心に火花が散ったように感じました。実は、私の日本語力は日常会話レベルです。その証言は日本語で話されたので、ほとんど内容は理解できませんでしたが、彼の表情、声のトーン、身振り手振りにより、どんなにひどい状況だったかが分かりました。



最大の犠牲は、痛みを伴う犠牲です。悲しい話を聞いて涙ぐむ人はよく見かけますが、その証言が終わった後、私たちのリーダーは 5 分以上、涙で声を震わせて、説明し続けました。見ている側も胸がつまる思いでした。実際に会場にいれば、彼女がいかに深く共感していたかが分かるでしょう。タリタクムは素晴らしいコミュニティだと実感しました。



私は当初、このサマーキャンプは、セミナーや証言を聞くだけの、単調で退屈なイベントかと思っていましたが、それは大きな間違いでした。人間の基本的要求である休み時間を、合間にとることを忘れなかったからです。レクリエーション企画はとてもシンプルで、互いに打ち解けるのに大いに役立

ちました。タリタクム・ユースのメンバーは皆、とてもエネルギッシュなので、自分と同じ 20 代前半かと思いました。日々、どの若さの泉からの水を汲んでいるのか教えて欲しいほどです。夕食にピザをオーダーしてくれた方にも一言。お忙しくてほとんど会えませんでした。ピザの選択センスは抜群でした！

素晴らしいコミュニティには、強固な基本的概念と現実のインパクトが欠かせない

一日目が終わり、タリタクムが取り組んでいる人身取引との闘いの要旨がなんとなく分かってきました。私は 5 年前にインドネシアから、この日本という、独自の文化をもつ一風変わった国にきました。例えば、日本ではアニメ文化が花開く一方で、伝統的な文化も大切にしています。その背後には、社会の狭間に潜む闇がありますが、そのことは長く住んでみないと分かりません。



私がタリタクムから感銘を受けたのは、多くの組織が残念ながら持ち合わせていないアイデンティティを、すでに持っているからです。大きな難題に直面した際、タリタクムはアドボケートの役割に徹します。人身売買業者を逮捕する警察でもなく、人身売買の被害者を保護する孤児院でもなく、加害者の混乱した心理を解き明かそうとする心理学者でもありません。タリタクムは、この混沌とした世界が、私たちにとって少しでも生きやすい場になるよう、語りかけ、意識を高めます。若者たちが被害者にも加害者にもならないように、現実を伝えます。

さらに、タリタクムは自らのプログラムを実行に移します。サマーキャンプの 2 日目には、2 校から実際に寄せられた依頼に取り組みました。ワクワクしました。長い間、カトリック教会のコミュニティの一員でしたが、社会に直接インパクトを与えるようなプログラムに出会ったことはありませんでした。私たちはアイデアを出し合い、情報を交換しました。行きつ戻りつするやりとりの中にも、互いへの敬意が感じられ、非常に実りあるディスカッションになりました。



仙台に戻る 2 時間の新幹線の中で、知人と話し込みました。タリタクムというグループに対して抱いていたビジョンが具体化して、彼女は本当に喜んでいました。遠く離れた仙台に住む私にとって、東京に新しい家族ができたことは実に幸せなことです。社会にインパクトを与えるコミュニティ。このエッセイを読み返すと、彼らの素晴らしさの 50%しか表現できていないようです。今後もタリタクムの活動に是非、目を向けていただきたいと思います。

2024 年2月 8 日(木)「世界人身取引に反対する祈りと啓発の日」



聖ジョゼッピーナ・バキータの記念日である2月8日(木)、「世界人身取引に反対する祈りと啓発の日」に、タリタカム・インターナショナルは例年通り、祈りのリレーを行います。今年のテーマは「活動への呼びかけ：聞く、思い描く、行動する(Call to Action: Listen, Dream, Act)」です。タリタカム日本による動画も YouTube 配信されます。プログラムや URL リンク等の詳細は後ほどお知らせしますので、是非、ご覧ください。

『タリタカム日本パンフレット』発行のお知らせ

カトリック校への出前授業を始めるにあたり、タリタカム日本は青少年向けのパンフレット(A5版4ページ)を作成しました。

日本語版だけでなく、英語版とベトナム語版もあります。基本的な問いに分かりやすい文体で答えていますので、ご希望の方は事務局までお申込みください。



人身取引とは？

暴力、脅迫、誘拐、詐欺などの強制的な方法により、女性、子ども、その他あらゆる弱い立場にある人々を別の国や場所に移動させ、売春や強制的な労働をさせて搾取することです。



「タリタカム」とは？

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」という意味の、聖書の中のアラム語の言葉です。イエスは死んでいるように見える12歳の娘に「タリタカム」と語りかけました。イエスが彼女の手を取ると、娘はすぐに立ち上がり、歩き始めました。この言葉は、苦しみの中に置かれた人身取引の被害者が、それでも希望をもって起き上がり、生き続けるように呼びかけています。

この呼びかけを原動力として、カトリック教会の国際ネットワーク、タリタカムは活動しています。

その使命は、人身取引、現代の奴隷制度、強制的労働を無くし、虐げられた人の尊厳と人権を取り戻すことです。

タリタカムは女子修道会国際総長連盟(UISG)のプログラムの一つとして、2009年に発足し、2022年度現在、97か国をつなぐ58の地域ネットワークによって構成され、5000人以上のシスターや協力者を結びつける世界的なネットワークとなっています。



タリタカム日本からの声

日本にも、この人身取引の問題があることを知っていますか？皆さんと同じくらいの年の若者たちが犠牲者となっています。

米務省は、世界各国の人身取引に関する2023年版の年次報告書を発表しています。188の国・地域を評価していますが、日本への評価は4年連続で「対策不十分」に据え置かれています。日本では外国人技能実習制度の下で強制労働の報告が続いていると指摘されています。

高齢化が進んでいる日本の社会で、いわゆる3Kと言われる「汚い、きつい、危険」な仕事に携わっているのは、外国から来る若者たちです。言葉も文化も違う環境で、人権無視の労働条件を押し付けられている人たちにに対して手を差し伸べるネットワークの一部として、タリタカム日本は努力しています。

まず、知ること、関心を持つこと、仲間となることを考えてみませんか。

タリタカム日本委員長 弘田しずえ (ベリス・メルセス女修道会)

募金のお願い

「タリタカム日本」では、人身取引被害者の救済活動や啓発活動など今後の活動のための募金をお願いしております。ご協力よろしくお願いいたします。

郵便振替口座 00110-8-560351

加入者名 日本カトリック難民移住移動者委員会

「タリタカム日本活動支援」の欄に☒を入れるか、

通信欄に「タリタカム日本」と明記してください

日本カトリック難民移住移動者委員会

電話:03-5632-4441 FAX:03-5632-7920 E-mail:jcarm@cbcj.catholic.jp